

高等讀本

山縣悌三郎編纂

八

T1A3

10

Y 22

山縣悌三郎編纂

高等讀本

明治二十七年四月十日
文部省再檢定済學校教科用書

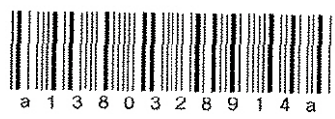
文學社

高等讀本卷之八

目次

第一課	憲法發布	一
第二課	憲法七章	三
第三課	本を思ひ恩に報ゆ 其一	四
	德川齊昭	
第四課	本を思ひ恩に報ゆ 其二	六
	德川齊昭	
第五課	常陸帶ノ序 其一 藤田彪	八
第六課	常陸帶ノ序 其二 藤田彪	十

圖書 和圖書 遡



福岡教育大学蔵書

高等讀本

卷之八

一

文學社

第二十六課 德川家康厩を新造せず 六十四

第二十七課 蒙古の來寇 其一 六十五

第二十八課 蒙古の來寇 其二 六十七

第二十九課 那須與一の事 其一 和文 平家物語 七十

第三十課 那須與一の事 其二 和文 平家物語 七十二

高等讀本卷之八

第一課 憲法發布

明治二十二年の紀元節に於て、天皇陛下は
憲法發布の盛典を舉げさせ給へり。此日先づ皇
祖神靈賢所を御親祭あらせられ憲法發布の御
告文を奏せさせ給ひ、畢りて正殿に出御し給ひ、
勅語ありて憲法を内閣總理大臣に授け給ふ。其
詔に曰く。

朕祖宗ノ遺烈ヲ承ケ萬世一系ノ帝位ヲ踐ミ、

第七課 心適庵の記 清水漬臣 十四

第八課 一大航海者 其一 十五

第九課 一大航海者 其二 十九

第十課 芭蕉庵桃青 二十二

第十一課 月は世々の形見 室直清 二十四

第十二課 毀譽 橘南谿 二十六

第十三課 雷電の話 其一 二十九

第十四課 雷電の話 其二 三十二

第十五課 電魚 三十六

第十六課 慎微 岡白駒 四十

第十七課 酒のいましめ ト部兼好 四十一

第十八課 氷河奇談 其一 四十四

第十九課 氷河奇談 其二 四十五

第二十課 氷河奇談 其三 五十

第二十一課 誠 松平定信 五十四

第二十二課 安藤聖秀 室直清 五十六

第二十三課 小宮山内膳 室直清 五十八

第二十四課 豊後守忠秋の廉潔 室直清 五十九

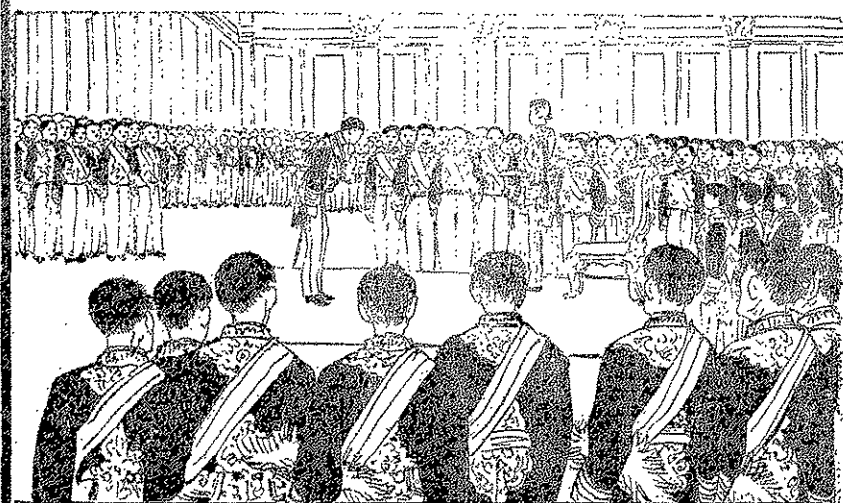
第二十五課 山内一豊馬を買ひし事 新井君美 六十一

朕ガ親愛スル所ノ臣民ハ、即チ朕ガ祖宗ノ惠撫慈養シタマヒシ臣民ナルヲ念ヒ、其康福ヲ増進シ、其懿德良能ヲ發達セシメンコトヲ願ヒ、又其翼賛ニ依リ、與ニ俱ニ國家ノ進運ヲ扶持セシコトヲ望ミ、乃チ明治十四年十月十二日ノ詔命ヲ履踐シ、茲ニ大憲ヲ制定シ、朕ガ率由スル所ヲ示シ、朕ガ後嗣及臣民ノ子孫タル者ヲシテ永遠ニ循行スル所ヲ知ラシム。
國家統治ノ大權ハ、朕ガ之ヲ祖宗ニ承ケテ、之ヲ子孫ニ傳フル所ナリ。朕及朕ガ子孫ハ、將來

此憲法ノ條章ニ循ヒ、之ヲ行フコトヲ愆ラザルベシ。

朕ハ、我臣民ノ權利及財産ノ安全ヲ貴重シ、及之ヲ保護シ、此憲法及法律ノ範圍内ニ於テ、其享有ヲ完全ナラシムベキコトヲ宣言ス。
帝國議會ハ、明治二十三年ヲ以テ之ヲ召集シ、議會開會ノ時ヲ以テ、此憲法ヲシテ有効ナラシムルノ期トスベシ。

將來若シ此憲法ノ或條章ヲ改正スルノ必要ナル時宜ヲ見ルニ至ラバ、朕及朕ガ繼續ノ子



憲法發布式の圖

孫ハ發議ノ權ヲ執リ之ヲ
議會ニ附シ議會ハ此憲法
ニ定メタル要件ニ依リ之
ヲ議スルノ外朕ガ子孫及
臣民ハ敢テ之ガ紛更ヲ試
ミルコトヲ得ザルベシ。
朕ガ在廷ノ大臣ハ朕ガ爲
ニ此憲法ヲ施行スルノ責
ニ任ズベク朕ガ現在及將
來ノ臣民ハ此憲法ニ對シ

永遠ニ從順ノ義務ヲ負フベシ。

式畢りて後 天皇陛下は皇后陛下御同車にて、
青山練兵場へ親臨あらせられ、閱兵式を天覽ま
し、還御あらせられき。

是日輦轂の下はいふまでもなく、全國の臣民
舉げて 天皇陛下の萬壽無疆を祝し奉らざる
はなかりき。

第二課 憲法七章

大日本帝國憲法ハ總ベテ七章七十六條ヨリ

成レル萬世不磨ノ大典ニシテ帝國臣民タル者ハ此憲法ニ對シ永遠ニ從ハザルベカラザルモノナリ憲法第一章ハ大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治シ給ヒ天皇ハ國ノ元首ニシテ統治權ヲ總攬シ此憲法ノ條規ニ依リ之ヲ行ハセ給フコトヲ明カニシ第二章ハ臣民ノ權利義務ノ要件ヲ定メ第三章ハ帝國議會ノ成立及ビ權限ヲ明カニシ第四章ハ國務大臣ハ天皇ヲ補助シ奉リテ其責ニ任ズルコト及ビ樞密顧問ハ天皇ノ諮詢ニ應ヘ奉リ重要ノ國務ヲ審議スルコ

トヲ明カニシ第五章ハ司法權ハ天皇ノ御名ヲ以テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フコトヲ定メ第六章ハ新ニ租稅ヲ課シ及ビ稅率ヲ變更スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムルコト及ビ國家ノ歲出歲入ハ帝國議會ノ協贊ヲ經ルコトヲ示シ第七章ハ補則ニシテ將來憲法ノ條項ヲ改正スルノ必要アルトキハ勅令ヲ以テ議案ヲ帝國議會ニ附スルコトヲ定メラレタリ。

第三課

本を思ひ恩に報ゆ 其一

人は貴き賤しきによらず、本を思ひ恩に報いむ心懸け、專一と存じ候ふ。抑日本は神聖の國にして、天祖天孫統を垂れ、極を建て給ひしよりこのかた、明德の遠きこと、太陽とともに照臨ましまし、寶祚の隆なること、天壤と共に窮りなく、君臣父子の常道より、衣食住の日用に至るまで、皆これ天祖の恩賚にして、萬民永く飢寒の患ひを免れ、天下敢て非望の念を萌さず。有りがたうと申すも、恐れ多き御事なり。

されば、人たる者かりそめにも、神國の貴きゆ

ゑんど、天祖の恩賚とを忘るべからず。夫々本を思ひ、恩に報い候ふやう、心懸け申すべく候ふ。人々形こそ生れつきたることなれ、心は愚かなるより、賢きにうつさばうつるべし。されば、古の忠臣義士を學び、後代にはよき例にもひかれ、父母の名までも顯すやうに、眞實に心懸けたき事に候ふ。

文武の道は一致と存じ候ふ。士たる者、不學文盲にては、相濟まざる事と存じ候ふ。我等淺學にて、古今に暗けれども、幼きより、神聖の道を學び、

つらく思ふに君臣父子の大倫は勿論祭祀を
崇み本に酬ゆる道より勇武を尙み耻を知る義
に至るまで皆神代の昔より備はりたる事にて
忠孝文武など云ふ文字こそなけれ其道はまさ
しく神國の大道と存じ候ふ。

其上風俗の美なること威稜の健きこと何も
事かけたることあらざれども後の聖君賢主殊
更に人に取りて善をなし給ひ經書賢人を異國
に求め給ひたるゆゑ漢土の書籍渡り來て孔子
の道も傳はり神國の道ますます明かに制度も

追々に備はりたることなれば漢土の道も神國
の人學ぶ時は即ち神國を尊ぶ道なり。

第四課 本を思ひ恩に報ゆ 其二

義公の遺訓にも士の大節に臨みて嫌疑を定
め義理を分つこと學問に有らずしてそもく
また孰ぢや云々とのたまへり文武の一致なる
儀を辨へどにかく修業專一に心懸け何事を學
ぶにも年月を頼まず學ばむと志さば速に學ぶ
べし何程才氣ありても生れのまゝにて學問せ

されば古今に闇きゆゑよき了簡分別も出づま
じく候ふ。南蠻鐵も數度の鍛ひをえて名刀の名
を得、白玉も磨瑳の數を経て夜光の名は得るこ
となれば文武とも壯年の者は精を勵まし候ふ
様に致したく候ふ。

利欲は人情誰にても有る事に候へども人は
いかになり候ひても已に利あらば宜うと思ふ
はあさましき事にて、利を見ては義を思ふと云
ふ聖語忘るまじく候ふ。人も我も一同に利にな
り候ふやう公平なる事に候はゞ利も惡うきに

あらず候へども人を苦しめて己を利し廉耻を
忘れ金銀を好み候ふなどは沙汰の限りに候ふ。

子孫教育の儀は其親々に如在もあるまじく
候へども幼年より貴さを挾む様にあしく癖を
つけ候ふはよからぬ事なり。天下の達尊三ツと
あれば朝廷にてこそ爵は貴ふべけれ、徳を尊び
齒を尊ぶ事もなくては叶ふまじく、先生長者を
も敬はざる様にては宜うかざらる事に候ふ。

「國の本は家にあり、家の本は身にあり」と申し
候へば面々眞實に身を修めむと心懸け候はゞ、

國も治まらずして叶はざる理と存じ候ふ。仍りては行跡を嗜み一家を齊へ忠孝文武を以て勵ましあひ國家と休戚を共にする心得有りたく候ふ。恐れ多くも天祖の恩にて神國に生育し居り候ふ事申すまでもこれ無く候へば萬一事あらむ時は天朝の御爲には身命を塵芥よりも輕んじ大恩に報い奉るやう常に心懸け申すべく候ふ。

徳川齊昭

第五課 常陸帶ノ序 其一

東路の道の果てなる常陸帶

かごと許りも逢はんとぞ思ふ

ト云ヘル古歌ノ心ハ別レニシ人ヲ慕ヒテ暫シ
ダニ逢ハマホシキト云フコトヲ帶ノ彼ナタ此
ナタト分レテモ廻リ逢ヒテ結ブコトアルニ掛
ケテ詠メルナルベシ。男女ノ情朋友ノ道カクノ
如シ。臣トシテ君ヲ慕フ心將タ然ラザランヤ。過
ギニシ己丑ノ年中納言ノ君世ヲ嗣ガセ給ヒシ
時。彪年廿バカリニテ皇朝ノ史ヲ考ヘ定ムル業

シテアリケルヲ明クル年青人草ヲ撿ベ治ムル職ヲ仰セテ江戸小石川ナル屋形ニ召サレ初メテ君ヲ拜ミ奉リケルニ彪ガ職ノ事イト懇ニ問ハセ給フ。シカノミナラズ忠孝ノ義ヲ明カニシ文武ノ道ヲ勵マシ祖宗ノ遺志ヲ繼ギ神君ノ恩賚ニ報イテ天日嗣ヲ天地ト共ニ仰ギ奉リテ豊葦原ノ中國ヲ常磐ニ堅磐ニ守リナント志シ給フ御事マデ仰セテ畏ミ種々ノ賜ナドシテ古郷ニ罷リヌ。是レヲ初メトシテ辱クモ屢御書下シ賜ハリテ政ヲ正ウシ惠ミテ施シ足引キノ山里

ニ住メル賤ガ男マデモ安ク樂シミテ世ヲ渡ル許リノ様ニ成シナンコトヲ計リ給フゾ畏キ。三年許リ過ギタレバ彪職ヲ易ヘテ政ノ末ニタツサハリタレド身ノ程ハ猶卑シクテアリシヲ又五年許リノ後仰セテ蒙リオホケナクモ年寄若年寄ナド云ヘル職ニ續キテ政ヲ物スルコトヲ司リ往ニシ庚子ノ年ノ春君ニ從ヒテ大城ニマ井ノボリ畏クモ大將軍ノ君ト右大將ノ君トヲ拜ミ奉リ君ノ御供シテ故郷ニ歸リヌ。去年ノ夏君日光山ニ詣デ給ヒ五月ノ中ツカタ暇ヲ請ヒ

給ヒシ時、彪モ亦大將軍ノ君ト、右大將ノ君トヲ拜ミ奉リケルニ、五日許リ過ギヌレバ大將軍家、殊更ニ御使ヲ以テ、君ヲ召シ給ヒ、何クレノ事褒メ給ヒテ、黄金作りノ御佩刀ニ種々ノ物添ヘテ、君ニ參ラセ給フニゾ、君モ臣モ悦ビ勇ミ、錦着テ晝行ク心地シテ、故郷ニ歸リケル。未ダ一年モ過ギザル年ノ卯月末ツカタ、君暫シ江戸ニ參リ給フベキ旨、老中ノ人々仰セテ傳ヘシニ、君素ヨリ大將軍家ヲ敬ヒ給ヘバ、急ギ出デ立タントアリケルニゾ、彪等物モ取リアヘズ、御供シテ、小石川

ノ屋形ニ着キシハ、五月五日ノ日ノ巳ノ時許リニナンアリケル。人皆嬉シキ例シテ引キテ、アヤメ草アヤ珍ラシク待チケルニ、思ヒキヤ、明クル日君ハ、馳テ世ヲ遁レ給ヒテ、駒籠ナル屋形ニ籠モリ給フベキ仰セテ蒙リ給ハントハ、彪モ何某等ト共ニ職ヲ放タレ、蟄マリ居ベキ仰セテ畏リヌ。彪等ガ身ハ、陌ノ塵、濱ノ真砂ニ均シケレバ、散リ失センモ、浮キ沈ムモ、物ノ數ナラ子ドモ、只管忠孝文武ノ道ニノミ心ヲ寄セ給ヒテ、世ニ類ヒナキ君ノ如何ニシテカ、ル禍ニハ逢ヒ給フラ

ン。花ヲ待ツ梅ガ枝ニ寒ケキ風吹キスサビ久方
ノ月ハ清メルヲ夜半ノ浮キ雲立ち隠ス例シニ
ヤアルラン。兎ニ角ニ理リ分カヌワザニテ悲憤
トコソ云ハメ慷慨トコソ思ハメ。

第六課 常陸帶ノ序 其二

折リシモ五月雨痛ク降り續キテイトゞ哀レ
ヲ添ヘシガ月日經テ空ハ晴レヌレドモ涙ノ袖
ハ乾キダニセズ。何時カ御禊モ過ギ秋モ半ニナ
リヌレバ世ヲ浮雲ノ絶エ間ナク又シモ霖雨降

リ出ダシ板屋ノ軒端ヲ廻ル雫ノ音荒レ庭ノ草
葉ニスダク蟲ノ聲聞クモノ見ルモノニツケテ
君ヲ慕フ心ハイヤ増サリケレバ草枕旅ノ宿リ
ニツクトト往ニシ十年餘リノ事ヲ思フニ或
ハ豊サカ昇ル朝日ノ影ニ兎ノ星ヲ輝カシ若草
萌ユル春ノ野ニ駒ノ足ヲ並ベテ治マレル世ニ
亂レヲ忘レザル例シヲ引キ秋風ニ懸カル隈ナ
キ月ノ夜ハ樓船ニ棹サシ出デ、眺メモ廣浦ノ
最中ニ詩歌管絃ノ興ヲ催シ給ヒ或ハ道弘ムト
イフ館ニ若キ男等ヲ集メテ文學ビ鎗太刀ツカ

ヲ技ヲ試ミ給ヒ或ハ偕ニ樂シムトイフ園ニ年
高キ人々ヲ招キテ四方ノ景色ニ心ヲ慰メ物ナ
ド賜ハリテ老ヲ養フ古事ヲ慕ヒ給ヒ或ハ霜ノ
夜雪ノ旦山野ニ鷹狩リシテ御身ヲナラハシ或
ハ瓦ノ窓繩ノ戸ボソニ至リテ貧シキ民ノ情ヲ
知リ給フ類ヒ其折リ毎ニ御側近ク侍リテ畏ク
モ御樂シミヲモ御苦シミヲモ共ニ進ラセシ
ニ今ハ君モ臣モカナタコナタニ寵モリ潜マリ
居テ思フコト人ヅテモテ聞コエ上ゲンコトダ
ニ叶ハヌ世トナリヌレバ去年ノ五月ノ事ハ夢

ニヤアリケン今年ノ五月ノ事ハ現ニハヨモア
ルマジナド賤ノ苧ダマキ繰リ返シ昔ヲ思ヒ出
ヅルマニマニ書キ綴リテ君ニ目見エヌル心地
ヲナシ徒然ヲ慰ムル程ニ水莖ノ跡積モリテ机
ニ滿チヌレバ分チテ上下二卷トナシ名ケテ常
陸帶ト云フ垂レ籠メテ獨リ住ム身ハ俱ニ語リ
合ハン人モナク假リ初メノ旅ノ宿リニハ考ヘ
明カスベキ書モナク全ク彪ガ見聞キタル事ヲ
繰リ出ダシテ其アラマシテ記シナレバ古語
ニ云ヘル細キ管モテ大空ヲ窺ヒ鼎ノ中ナル一

切レノ肉ヲ嘗ムルニ均シカルベシ。抑昔ヨリ忠臣孝子トモ云ハル、人ノ世ノ禍ニ逢ヒテ覺エ又罪蒙レル者少カラズ。異邦ノ事ハ舉ゲテ數ヘ難ク、又近キ世ノ事ハ憚リアレバ得モ云ハズ。菅原ノ大臣ハ誠ヲ盡シテ寛平ノ政ヲ補ヒタレドモ、讒者ノ爲ニ西ノ果テナル筑紫ノ配所ニ赴キ、大塔ノ皇子ハ身ヲ竭シテ元弘ノ亂ヲ平ゲ給ヒシカドモ、姦臣ノ爲ニ東ノ鄙ナル相摸ノ窟ニ潜ミ給フ。イトアサマシク、イトツレナキワザニハアレド、年ヲ經世ヲ重ヌルニ隨ヒ、其名イヤマシ

香ハシク、百千年ノ今日マデ稚キ童子、賤シキ民マデモ、尊ビ畏ミヌルヲ以テ見ルトキハ、我が君一タビ浮世ノ禍ニ逢ヒ給フトモ、千年ノ後マデモ、御名輝キテ萬代ノ鏡トナリ給ハンコト著シ。然アレド、現ノ世ニハ得明カナラデ、末遠キ後ノ世ヲ待チナンコト、天ガ下ノ亂レタル時ハ、サモコソアラメ。今九重ノ雲曇リナク、眞澄ミノ鏡明カニシテ、朝廷ノ御惠ミ至ラヌ隈モナク、殊ニ大將軍ノ君ハ、玉鋒ノ直ナル道ヲ慕ヒ給ヒテ、萬ノ政邪ナルヲ去リテ、正シキニ就キ給フコト、諸人

ノ仰ギ奉ル所ナレバ一タビハ青蠅ナス輩ニ任
セ給フトモ東照ラス神ノ御靈ノサキハへ給ヒ
テ平カニ廣ク見晴ラシ給ハンニハ寒ケキ風和
ギテ長閑ナル春ノ日ニ梅ガ色香見スル如ク立
チ蔽ヘル浮キ雲消エ失セテ爽カナル秋ノ夜ニ
月ノ光サヤケキガ如クニ我ガ君本ヨリ曇リナ
キ御心殊ニ著シク濁リニ染マヌ御身殊ニスガ
スガシクナリ給ハンコト疑フベクモアラズサ
ラバ板廂雨漏ル假リノ宿リニ昔ヲ忍ビテ涙ニ
沈メル賤ガ身モ曇レル眼推シ拭ヒコホレル袂

打チ拂ヒテ常陸帶ノ例シヲ引キテ再ビ君ヲ拜
ミ奉ランコトノアラザラメヤハ。

藤田彪……………常陸帶

第七課 心適庵の記

いでや水を見よ、荒海のゝほのみちひも、山か
はの瀧つはやせも、かゝみなす池の面のさゝ浪
の水の心にかはることやはある。廣きには深く
早きにはいきほひつよく、所せきにはれのづか
らこまやかに、ほとくゝにうのけぢめ見ゆるぞ

かゝ。人のこゝろれきてもまたゝかゞあるべき。時なるをりはつかへの道にいろゝかりゝも時失なはゞ又ゝづけさを樂みて、さかりなるをも喜ばず、衰ふるをもくやまず、よく天地のれのづからなることありを思ひとりて、世につれ時にゝたがひ、身をみさをにもてつけ、らやまず歎かず、其程々に心を慰め、浮き沈む世の淵瀬をや、すく流れ渡るところ、行く水の清き心とはいふべく、世を身のまゝとゝ、身をまた心のまゝとすどは聞ゆべけれ。とゝに心を修めて足ることを知

るみやびを世にまれゝなり、我言の葉の友にゝて、うまく其樂みをはらに味ひ得られたるは古河の世すて人流阿彌陀佛なるべゝことありや、其庵の名を心のまゝとよばるゝこと。ゆゑ水にこゝろをのせてあうばなんつながぬ舟をみのたぐひにて

清水濱臣……………泊々文集

第八課 一大航海者 其一

茲に最も愉快にゝて、且つ勇壯なる話を語り

聞かせん。うは今より四百餘年前伊太利のゼノ
アに生れし一男子の事に係れり。男子の父は貧
しき身なりしかど子を教育するの志篤く男子
も亦幼より好みて天文地理等の書を讀めり。

是時世界の大きさを知るものなく又其圓體な
るを悟りしものもなく唯其目に見ゆる限を以
て平かなるべしと考へしには過ぎざりき。然る
に獨り此男子は年漸く壯なるに及び最も心を
世界の形狀大小に注ぎ殆んど寢食を忘れて之
を講究し遂に世界は圓體なるべし圓體ならざ

る可からずとの理を考へ出だし今日東に向て
航する人は必ず印度に達すると同く若し西
に向て航せんにも亦必ず印度に達すべしとて
是時までは誰しも考へ及ばざりし大西洋の航
海を思ひ立ちけり。其言ひ曰く若し西に航して
最も遠きに至らば金銀草木も富む良地を發見
するなるべしと。

抑此男子は何人ぞ。是れ彼の有名なるクリス
トファー・コロンブスなり。コロンブスは晝とな
く夜となく世界の圓體なるべき理を考へ又之

に關する圖書を研究し學者を訪ひて此事を尋



コロンブスの肖像

ねたり。又或時
遠洋に航する
水夫等に逢ひ
「遠く陸を離れ
たる大洋に於
て目なれぬ物
を見たること

なかりしか」と問ふに大西洋を越えたる者なけ
れば更に遠洋の事を知らず。大西洋の外は暴風

はげしくして常に暗黒なるべし唯時々カナリ
―其他の諸島に於て何れの處よりか珍らしき
物の流れ來るを認むることあり」と答ふるに過
ぎざりき。

コロンブスは愈我が説を信じいかにもして
自ら實驗して其説を確定せんと欲し逢ふ人毎
に世界の圓體なること大西洋の外に陸あるこ
とを説き實驗に力を添へ給へ」と説けども遂に
應ずるものなし。即ち先づ我が町長に請ひしに
肯ぜざりしかば去て葡萄牙王に説く。王は半其

説を信ぜし力が山ゝて助くるを欲せず。因て轉じて英王に説きしかど。英王も亦容れざりき。かくて數年を経て、コロンブスは西班牙王及び女王に説きて助力を求めたり。初めは拒みて聽かざりしが、七年の後遂に船舶を與へ、費用を給することを諾せし。かば、此に同行の舟子を募れり。

既にしつて募に應ぜる舟子も集まりし。かば、三小船を熾し、千四百九十二年の八月三日、コロンブスは西班牙のバトロス港に纜を解けり。舟子

の父母妻子は海邊に來り、此世の再會叶ひがたからんとて、何れも涙に咽び、別を惜むさま、目も當てられぬばかりなりき。

此三小船は海に浮びて走ること二月以上に及びしが、猶未だ陸地を見ざりし。かば、勇氣餘りある舟子等も、かくまで遠く陸地を離れたることなきが故に、漸々恐怖の念を生じたり。是も亦理なり、行けども行けども、小き島影だになく、漫々たる海は、天と連りて、又際涯あるべしとも見はざればなり。

コロンプスは舟子に向ひ「我が船決して危からず、陸地も必ず遠からざるべし」と諭しけれども最初こそ信じたれ、後には舟子等コロンプスの言を疑ひて「彼は發狂者なり」と語りあひ、はてはコロンプスを海に投じて、各あとに漕ぎ歸らんと相談するに至れり。コロンプスは舟子の相談を聞き知れども、還らんなどは思ひもよらず、勇みに勇みて身の危きをも感ぜざりき。

更に行くこと二三日にして、果實の附きたる樹の枝奇なる形を彫りたる木の片など、水上に

浮び来るを見、又鳥の群がり飛ぶを見、かば舟子等も少しく心を安んじ、さては陸地に近づくなるべしとて、各船上に出で、目をこらして四方を見張りけり。これは初め西班牙を出づる時王及び王妃は早く陸を認めたるものに、多くの賞金を與へんと約し、コロンプスも亦天鵝絨の上衣を與へんと約したればなり。

第九課 一大航海者 其二

かくて又行く程に、舟子等「陸あり陸あり」と叫

ぶこと二たびに及びゝが、それは遙に隔たりたる地平線上の雲なりき。

忽ち喜び忽ち失望して、又も進む中に、遂に眞の陸地を認め得たり。此時一行の喜果して如何許なりけん。初めコロンブスが陸地を見出ゝは、午前二時頃なりき。天の明くる頃漕ぎ寄せて、即ち陸に上り、海岸に坐して上帝を拜せり。此陸地は、喬木灌木繁茂して鬱葱たる島なり。コロンブスは、此島をサンサルヴァトルと名づけたり。島の中の人々は、色赤くして奇怪の装をなせり。コ

ロンブス等を見て、森林中に逃げ隠れゝが、其敢て追ひ討つ風なきを見て、漸く濱邊に出で來り聞き知らざる言語にて、何事か語り居たり。

コロンブス此地を印度なりと思ひゝまゝ、之を印度人と名づけ、溫容を以て之に接し、種々の器物を與へ、彼等をゝて喜ばゝめたり。

此印度人は、小家中に棲みゝが、其家根は椰子樹の葉にて葺き、其寢臺は木綿を懸けたる釣床なりき。

コロンブスは、四五日此島に滞留し、更に他方

に向て航行し、別に二三の島を發見せり。キューバ及びヘイチ島も、此時の發見に係れり。

到る處名も知らぬ奇花珍卉咲き亂れ、見ることみなき翠禽紅鳥、彼方此方に飛び遊べり。

斯て千四百九十三年の一月、コロンブスは、始めて歸途に就きぬ。然るに海上十四日間の暴風雨に會し、三艘ともに覆没を免るまじと思はれしかば、コロンブスは、委しく航海中の事を筆記し、蠟を塗りたる羅紗中に包み、箱に入れ、蠟をもて猶之を封じ、其箱を樽にして海中に投じたり。

是れ我が身假令魚腹に葬らるゝとも、此樽を開くもの、或は我が志を遂げたるを知り、西班牙王に語るものあるべしと思へる故なり。

幸にして此風雨其翌日にして已みければ、三月十五日、安全にパロス港に歸ることを得たり。コロンブス等が身に取りては、實に此日は無上の吉日なり。前古未曾有の大事業を企て、大西洋を横斷して、首尾よく故郷に還り來る當日の喜び、果して如何なりしぞ。即ち珍奇の產物と、奇怪の印度人などを携へ、王宮に參内して、王と妃とに

謁見したるに王と妃とは非常の敬禮を以てコロンプスを待遇せり。

此後コロンプスは三たび西印度に航せしが、漸く否運に傾き其率ゐる舟子等は皆叛きて命に従はず。朝廷には其功を嫉むものありてコロンプスを讒せしかば終に鐵鎖に繋がれて故國に召還さるゝに至れり。殊にコロンプスの爲に嘆くべきは王妃の薨じたるに在り。王妃は終始コロンプスを庇保せしが此に至りて此大功業者も遂に其冤を伸ぶるに由なく怏々の中に窮

死せるはいと悲むべき事なり。然れども其英名は史乘に赫々たるのみならず今又記念の爲に世界博覽會の開設あるはコロンプスの靈も亦必ず地下に瞑するならん。

第十課 芭蕉庵桃青

俳諧はもと連歌より出で、其風を一變せしものなるが初めは唯滑稽諧謔を旨とし風體や、鄙俚靡弱に流れけるを芭蕉庵桃青出で、新に正風の體を創し此道中興の祖と仰がる。

芭蕉は伊賀國上野の人にして、平宗清の裔孫なり。名は宗房、松尾氏忠左衛門と稱す。伊賀國主藤堂侯の世臣、藤堂良精に仕へたり。良精の子良忠、蟬吟子と號し、和歌を北村季吟に學びけるに、桃青少くして良忠の傳たりしかば、同じく季吟に従學し、最も俳諧を嗜めり。然るに寛文六年、良忠病死せしかば、主従の情義忍びがたく、風流の因縁はた忘れがたく、遺骨を負ひて高野山に登りぬ。是より遁世の念切にして、しばらく致仕を請ひしかど、更に許されざりしかば、僚友孫太夫

と云へるが門邊に、一片の短冊を貼附し、

雲とへだつ友かや雁のいきあかれ

とかきつけて、其儘なれし郷を去り、髪をねろして道服し、諸國を廻りて江戸に下り、深川六間堀に假りの庵を結べりき。

桃青初めより妻孥なく、また家に儻石の貯もあらざれど、恬然として吟咏し、唯斯道をたのみのみ。門人鯉屋杉風と云へる者、魚估にして家富めり。常に桃青に供給せりとぞ。こゝに居ると六七年、及門の士漸く衆くなりぬ。天和二年、此

庵回祿の災にかゝりしかば、飄然去て甲斐に遊び、明年又深川の舊地に歸り、焼けあとの草を拂ひ、かりそめに籬を構へ、一株の芭蕉を植ゑて、

野分してたらひに雨を聞く夜哉

と口吟みぬ。是より芭蕉庵と號し、其名天下に轟きぬ。其後また諸國を歴遊せり。

桃青元來居るに侍者なく、出づるに従僕なし。囊中はた一物を納めざれど、沿道の俳諧を嗜む者、爭ひて歡迎し、到る處門生懇待し、錢貨服具を贈らるゝも多けれど、或は貧民に施し、或は兒童

に與へて、身に一錢をも留めずとぞ。元祿七年の冬、難波に遊びしが、たまゝ痢疾に罹り、御堂前花屋某の家に臥して、

旅に病んで夢はかれ野をかけめぐる

此吟を遺して、十二月十二日長眠せり。享年五十三。門人に其角嵐雪、杉風、支考、許六等ありて、後世に至るまで斯道いよく盛なり。

第十一課 月は世々の形見

「今年もはや半過ぎぬれば、いつしか秋のけしき」

きたちて、萩吹く風も身にゝむ頃なり。久しく翁のかり行かねば、此ほどの老のねざめも覺束なし。いざたづね問はん、とてある夕暮に例の人々打ちつれて來うが、又もまゐらん、とて歸らんとせしを翁とゞめて、「今宵は月もよく薄酒すゝめ奉らん、強ひてとまり給へ」といへば、翁の心にはいかで背くべきさあらば、とて各座をゑめて、清談の露やうく繁きほどに、家人やがて心得て取りあへぬまでにあるゝまうけし、さかなとりうへて盃出しけり。諸客皆酔うて興に入るとぞ。

見えし。其後數獻に及びて、玉山倒るゝばかりに見えけり。さて翁いふやう、大かたは月をもめでしとはよみたれども、老の心も月みるにぞなぐさみ侍る。されどうれにつきて、千載無窮の感もれこりぬれば、うべ月を人の老となる、と云ふべかめり。但、月を見るにいろくあり。今思ひ出たり侍る。童子の時家にて八月十五夜の宴にひとり隅にむかひて居たりしに、さる武士の一丁字も知らぬが、月をつくく、と見て、「月はあたりいく尺かあるべき。各考へて見給へ」といふ。又同く

やうの人かたつより、あれはものゝ切口とみゆ。奥へながさいかほどかあらんとて、互に僉議しけるを、聞く人々、皆舌を喰ひけり。翁も、をさな心にをかりかり。今思へば、世俗月を賞して、光のあかきをほこり、影の清きにめで、良夜とて、ただ打ちより、物喰ひ酒のみなどして、歌ひのゝ、を樂とするは、かの寸尺を語るにひとゝかりぬべし。又騷人墨客の、月をながめて、字毎に金玉を雕り、句ごとに錦繡を裁するも、風雅には聞ゆれど、うれもたゞ景氣のうへを翫ぶばかりにて、

月に深き感ある事をあらぬなるべし。翁が千載無窮の感と申すは、我儕古人を慕ひて、其書をよみ、其心をきりつゝ、常に世を経たる恨あるに、月ばかりこそ、世々の人を照し來て今にあれば、古人の形見とも云ふべし。されば、月に對して、昔を忍びては、さながら古人の面影もうつるやうに覺え、月はものいはねども、語るやうにもれぼに、忘れては、昔の事をとはまほしくも思ふぞかし。

室直清……駿臺雜話

第十二課 毀譽

余が四方に漫遊せし主意は、諸國の風土氣候を親しく身にうけ考へて、著はす所の醫書に誤りすくなき様にあらしめ、普く世間の病者の益にもならん様との事なり。それにつきては、諸國をめぐれば、異病奇疾をも多く見及び、奇方妙藥をも傳授を得て、醫事の修行、漫遊の益少からず。猶其餘りには、文雅の事、武備の事はもとより、よき人を見ては、我身の手本として見習ふ様に心得、惡き人に逢ひては、自ら此の如き事やなきと

顧み、慎む種とする事なり。其善と思ひ、惡と思ひし事、多年漫遊の間には、數々ありて、心やすき人には語りも傳へ、又世に残さまゝと、たれもふ書には書きもするせる事あり。今に至りて、其譽めたりし人も、つくく見れば、其行初めの如くにもあらで、操屑かぬ様なるもあり、又毀りたりし人も、いつよりか行も改まりて、余などの口にてとから論ずまじき様にみゆるもあり。過し年既に人にも語り傳へ、文にも書あるせし事の、今見ればよく違ひたれば、余も他人より見給はゞ、彼人

を惡いといひは、彼人に恨にてもありや、又彼人を善といひは、彼人にゑこひぬきありやと見にて、余が定見の淺々きをもにくみいやりみ給ふべし。實に馴も舌に及ばずとて、筆に残し詞に出し、事は取りかへ難き事、昔も今も同じ事にて、これらの事をれもひ出づれば、脊中に汗出る心地す。拙き身にもたどひ恨ある人にて、もよき事は掩ふまじ、親しむ睦ぶ人にて、惡き事は傾き助くまじと心得居れど、只世の人の始め終り調ひ難ければ、余も脊中に汗出づる事は

いで來ぬ。されど余が如きは、誠に名もなく徳もなく位もなく、強て余が詞を取用ふる人もなければ、只自ら耻づるばかりにて、事はすめり。若し位高く勢ありて、此の如く妄りに毀譽したるましかば、いかばかり世の害を引出す事かあるべき。されば上にまします人々の常々に御心を勞し給ふことは、草間の小民の知る所にあらずかし。いにしへ人の毀譽は死して棺の蓋を覆うて後に定まる、といひ置きし、それに違はずとぞ思はる。西國にて幼少の女子孝行の聞にありける

高等 讀本 二十八
を其あたりの儒士感心して、其事實をくはく文章に記し、普く人にひろめて勸善のためにもなれかし、且は孝行の名も世に聞えよかしと出だされけるに、其女子成長の後身持甚あしくなりき。儒士初めに記せし文章を破り捨て怒られしかど、益なくて世の人の笑ひ艸となられたり。此儒士の心根はいと殊勝にて、君子は人の美をなすといふ意にも叶ひ、善に感ずる事の深ければこそむつかしき世話をも厭はず、文章をも作りたるに、人の行の始終を全りする事の難き事

は昔より同じ事にて、名なき女子はかくれ行き、て儒士のみ人の笑ひ艸となれるはなげかはしき事にあらずや。此の如き事をみれば、生涯口を閉づるより外なけれど、人の善も語らされば傳はらず、あるされば残らず、嗚呼いかゞはせん。

橘 南谿……………東西遊記

第十三課 雷電の話 其二

雷電を電氣の發作なりと説き起さば、更に説明を要する程の事に非ずと嗤笑する者もあるべけれど、百五十年前までは、誰一人此見易き關

係を知る者無かりしなり。されど、此畏るべく驚くべき現象を説明せずに打ち棄て置くべきにあらずれば、古來雷電に就きて説を爲すもの少からず、殊に天帝が陰惡を罰し給ふの刑具と見做すが如きは、最も古くより最も廣く行はれたる説なりき。我が國にても、人の神靈は能く雷電を喚び起すものなりと思惟せしことは、管公の如き、廣嗣の如き、又新田義興の如き、英雄が死後雷電となりて、其仇を撃ちたる類の説多きを以ても知るべし。

又雷電は陰陽の相激して發するものなりと論じ、或は水火の相撃つなりと説き、西洋にても、地震は地中の雷にして、雷は空中の地震のみと論じ、或は空中に浮游する硫黃氣の、一時に發火するに過ぎずと説きたるものあるが如きは、皆虛理空論にして、實形の研究を後にし、想像の談を以て説明と誤認せるに坐するのみ。而して此流弊は、富蘭克林の如きも尙ほ免るゝ能はず。千七百三十七年には、依然空中硫黃氣の説を信じて居たりしなり。此等の謬説に比して更に下等な

るは其形猫に類し、爪牙甚だ銳利なりといふ雷獸說、虎皮褌を着け、太鼓を槌ちて天上を駆け廻ると説く雷神說、及び雷獸雷神が人の臍を攫み去るを恐れ、蚊帳を釣り、桑原を稱へ、線香を焚きて之を免れんと謀る防禦策の類なり。此等の謬説の尙ほ跡を俚俗の間に絶たず、雷鳴する毎に幾多無辜の小兒をして、恐怖の念を懷かしむるは、豈歎すべきにあらずや。

富蘭克林が電氣學の研究を始めたるは、今を距る百四十餘年、西曆千七百四十七年なりき。此

頃電氣學は尙ほ甚だ幼稚なる有様にて、ライデン壘の發明さへ僅にそれより二年前の事に係りしなり。ライデン壘は電氣を蓄積して、強烈ならしむべき具なるが、其構造は極めて簡單なるものにて、瓶口を塞げる木栓に銅線を挿み、瓶中には半ば水を盛りたるのみ。當時電氣學の始めて世人の注意を惹きたる頃なりしかば、不完全なる器械を用ひながらも、種々の實驗を試むること流行し、殊に電氣震撃の感覺は甚だ新奇にして、且つ少く危険の傾きあれば、怖きもの見

たき世人の常として之を自身に試みばやと思ふもの多く遂に所々に電氣發生器及びライデン壘を携へ廻りて此震撃を驚ぐものあるに至れり。

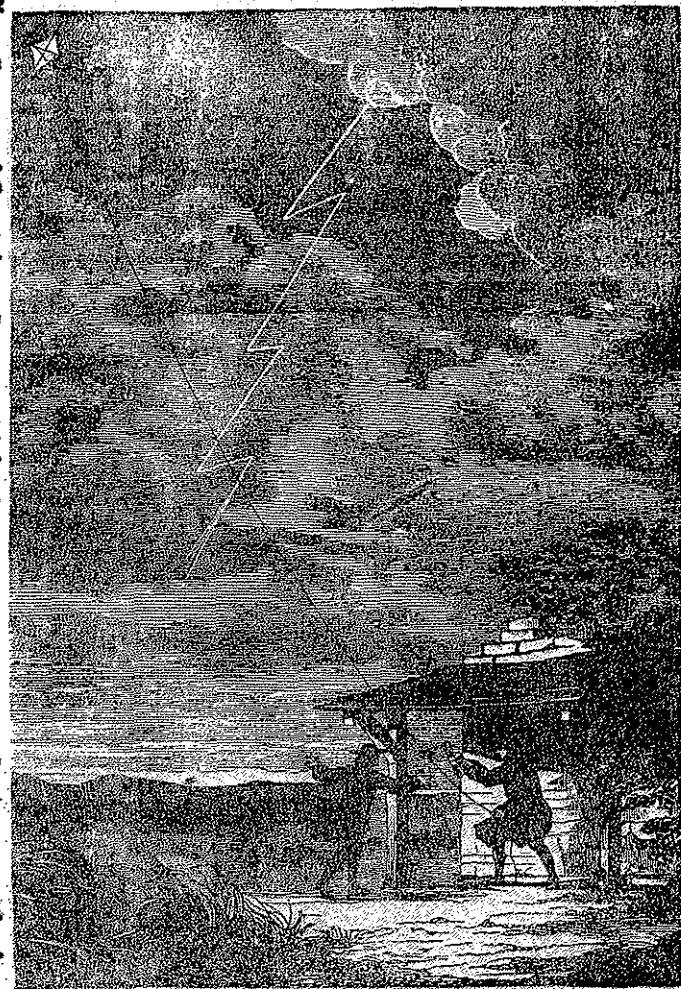
富蘭克林は嘗て其郷里ヒラデルヒア府に學問の普及を圖らんとて同好の士と力を協せ一の圖書館を設け置きけるが圖書は毎年英國の人コリソンより送付することゝ定めたり。千七百四十七年にコリソンは米國より注文の圖書の外に電氣機一組を寄贈せしかば富蘭克林は之

を見て大に喜び同年の冬より電氣の實驗に従事し翌年に至り遂に身を理學に委ねんと志を起し其生業とせし活版所を人に賣り煩雜の業務を辭し閑靜の地に卜居して日夜電氣學の研究に従事し遂に電氣より發する閃火は電光と同一物なるを推考せり而して其根據となるは電氣より發する閃火は其色電光の如く其進路の屈折せること其閃發の際高響を發し一種の奇臭を覺ゆる等大小強弱の差を除くの外殆んど電光に異なる所なりといふにあり而して

此推考の當否を決せんとするには大厦高塔の屋上に巨大なる鐵針を立て之に由りて雷電を帶びたる雲より其氣を吸引し之を取て其果して電氣なりや否やを驗定すべしと論じたり。

第十四課 雷電の話 其二

千七百五十二年に至り富蘭克林は其名を不朽ならしめたる彼の紙鳶の實驗法を案出し六月に至りて之を行ひたり。富蘭克林は杉の木片を以て紙鳶の骨を作り之に絹布の手巾を張り



富蘭克林の紙鳶に電氣を導く様子

其上に尖りたる針を附し線は電氣を

導かんが爲めに麻を用ひたれども手に執る部分は不導體なる絹を用ひ強猛なる電氣の襲撃

を避け、且つ麻絲の絹絲に結合する點に、一個の鑰を垂れたり。準備既に整ひしかば、富蘭克林は、毎日雷雲の至るを待ち居たるに、恰も好し黒雲空を蔽ひ、雷聲遙に轟き來れば、機失ふべからずと、窃に紙鳶を携へて家を出で、共有の荒地に赴き、傾廢せる小屋に入りぬ。固より失敗して人の笑を招かんことを恐れければ、伴ひたるは、纔に其子息一人のみ。

既に、紙鳶は高く雲間に飛びゆけども、毫も電氣を導下する徵候なし。此時若し通路の人

を、此二人が夏の雨中に、紙鳶を飛ばすを見せしめば、或は瘋癲院より逃走せし狂人と見做したらんも知るべからず。かくて富蘭克林は、試験の成らざるを慮り、稍落膽失望する際、忽ち麻絲の纖維、絹毛の如くに茸起するを見たり。是に於て勇氣忽ち百倍し、勃々たる心臓の鼓動を静め、舞ひ躍らんとする足を踏みしめ、拳を以て彼の垂れたる鑰に近づくるに、火光閃々として連發せしかば、又ライデン壘を取て之に接し、多量の電氣を得て、其作用を試みたり。此の如く富蘭

克林は其推理の適中せし證憑を得たる後徐に濡れたる紙鳶を收め欣然として歸路に就けり。

富蘭克林は千七百四十七年以來電氣の實驗に於て得たる所は悉く之を筆述して幾篇の論文となり之をコリソンに寄せ以て其厚意に報いたりしが此等の論文頗る大部になりしのみならず雷電卽越歴説の如き又之に基ける避雷針の計畫の如き最も新奇にして最も道理ある議論少からざりしかばコリソンは倫敦の書賈

に謀り之を出版せしめたり。佛蘭西の博物學大家ブツフタンは好みて其書を読みけるが富蘭克林の此著述を見て大に之を奇なりとし學者に命じて之を佛語に翻譯せしめたり。是より避雷針の効用も亦一般に學者社會の承認する所となり民間に於ても亦次第に之を應用するに至れり。而して其實際の効用に至りては構造の完全ならざるより非難する者ありしと雖も避雷の理と避雷の實とは依然として存するのみならず彼の不可思議にして最も恐怖すべかり

高等讀本 三十五
し雷霆の猛威を奪ひて之を捕へ此理學の柵内に繋ぎて永く世人の迷信を破り其畏懼の念を去らしめし功は萬世に傳へて滅せざるべし。而して此大發明を爲すに小兒の玩具たる紙鳶を以てせるが如きは實に人をして其思想奇拔異常なるに驚かしめずんばあらず。且つ其益雷電の現象を攻究して其電氣の消極的なるを證明せしが如き其事業たる實に始あり終ありと謂ふべし。富蘭克林が合衆國獨立の時に際し大に國事に奔走し樹立したる大事業の如きは載せ

て世界の史乘にあり。爰に之を喋々するを要せずと雖も其佛國に遊説して應援の條約を結びたるは實に佛人に得たる名望の結果に外ならず。而して此名望を喚起するには氏が電氣學上の發明大に與りて力ありしものなり。

第十五課 電魚

水中に棲息する魚類は千種萬類にして奇異なるもの甚だ多きが中にもすぐれて面白きは電魚なり。

抑一種異様の性質を有する此魚は他の魚の如く刺を有せず、銳利なる齒牙をも有せず、刀劍の如く銳き鼻尖をも有せず、強力なる尾をも有せず、唯其特性と云ふは、目に見ること能はざる電氣を有するに在り。されば、此魚偶然敵に邂逅するか、若くは餌食に出逢ふときは、忽ち其電氣を利用するなり。其電氣は、目に觸れざるものなるが故に、他の魚類も之が攻撃を避くることが能はず。

電魚中最も廣く世に知られたるは電鰩なり。

此魚は、體質滑にして、其尾は短く且つ太し。尾端は數多の圓筒を並べたるが如き形を爲せり。元來至て柔順にして、害毒なきもの、如く見ゆれども、他の物に觸るゝことあるときは、忽ち電氣を發して猛烈なる害を與ふ。此魚より發する電氣は、毫も通常の電氣と異ならずして、之より針に磁石力を與ふることを得べく、熱を生ぜしむべく、又電火をも發せしむべし。

又電魚中にマラプテル、スと云ふ一種あり。身の長さは一尺五六寸に過ぎずして、如何にも

美麗なる數多の斑點あり。中央亞非利加の河流に棲息す。ナイル河に他の物を食して麻痺せしむる力を有す。八魚の棲息することとは、三百年來世人の知る所なり。かども學說に於て全く此電魚なりと判然たるは、二十六七年來の事なり。此魚の電氣力は稍弱く、且其頭部に觸るゝにあらずれば之を起さずといふ。

南亞米利加洲の河流に産する電鰻は、最も怖るべきものにて、鰻類中の王と稱せらる。此魚の通常鰻と異なる所は、其口邊の完全せると、肋骨

を有するとにあり。其表皮は平滑にして鱗なく、其頭部は扁平にして橢圓形をなし、毒蛇の形に髣髴たり。其口には銳利なる齒牙百個以上あれども、食事を爲すの外は、絶えて物を咬むことなし。此魚の他を攻撃し、又は自家を防禦するの武器と頼むものは、即ち其電氣にあり。

フムボルト氏の說に曰く、南米の土人は電鰻の棲息する河流に、野馬を驅り入れて、之を捕獲す。野馬は縦横無盡に水中を驅け回り、電鰻の巢窟とも謂ふべき泥中を踏み荒らすが故に、電鰻

は大に怒りて電氣を發し頻りに馬を攻撃す土人は此機に乗じ徒歩にて河中に入り容易く鎗にて此魚を刺し得るなり。電鰻は既に馬蹄に蹂躪せられ馬を攻撃すること五六回に及びて疲勞を生じ電氣を用ひ盡したる場合なれば之を得ること難からずと云ふ。

此魚の有する電氣仕掛は殆ど其全長に亘り、兩側に各二個づつ都合四個の仕掛あり。此四個の仕掛は即ち膜様の平かなる室より成れるものにして此室と室との中間には鉛直なる壁様



兩米の土人、河に新魚を獲り、人にして、電鰻を捕獲する。圖

のものあり。此室内には、何れも膠質の如きもの
充滿すと云ふ。又ハンター氏の説に據れば、此魚
の全長中、一寸毎に二百四十室を有すと云へり。
斯る有様なれば、此魚は其體中電氣充滿し、肉體
は極めて少くして、電氣を他に運搬するの一方
便たるに過ぎざるものなり。亦奇なりといふべ
し。

此魚の電氣を有することを知らずして、捕へ
んとせし人に就きて面白き物語あり。或る人一
隻の船に魚類を積み込み、之を賣り捌かんとて、

南亞米利加を發せしに、此魚類中に電鰻も混じ
ありしが、偶、此船の乗組員中に一の印度人あり。
極めて自信深きものにて、魚獵の事は豫て能く
心得たるよし自負し居たりしかば、或る乗組員
無聊の餘金を賭して、右の電鰻を握らば、之を與
ふべきよし印度人にいへり。然るに此印度人は
此鰻に斯る特性ありとは夢にも知らず、大桶に
入れたる鰻の中に手を指し入れ、終に右手に一
鰻の尾を抓み、左手に其頭部を握りて引き上げ
つゝ、「我は全く五弗の賭を得たり」と呼はりしが、

忽ちにして電氣に撃たれ、一大叫聲を發したり。然れども元より電氣なることを知らざるより一種の妖怪を握りたりとや思ひけん、之を放ちて再び他の鰻を捕ふるに、其電氣に感ずることますます甚だしく、七顛八倒の餘、竟に海中に飛び込みしとぞ。

第十六課 慎微

禍福ノ萌其始ハ甚ダ微ナリ。故ニ庸人ハ之ヲ

慢リテ忽ニス。賢者ハ其始ヲ見テ、其終ヲ知ル。易ニ曰ク、履霜、堅氷至。トハ、是ヲ謂フナリ。霜地ニ敷クニ至レバ、是レ堅キ氷ニ至ルヲ知ルト云フコトナリ。善事ハ小ナリト雖モ爲スベシ。惡事ハ小ナリト雖モ爲スベカラズ。君子微ヲ慎ム。トハ是ヲ謂フナリ。書經ニ曰ク、不矜、細行、終累、大德。トイフモ、小事妨ナシト思ヒ慎マザレバ、終ニ大事ノ妨ト成ルト云フコトナリ。凡ソ事ノ成就スルモ、亦微ヲ積ミテ大ヲ成ス。今マハリ遠キ様ナル事ナレドモ、歲月ヲ積メバ、其事成就ス。

第十七課 酒のいまゝめ

世には心得ぬことの多きなり。ともある毎には、まづ酒をすゝめ、あひのませたるを興とする。こといかなる故とも心えず、飲む人の顔いとたへがたげに、眉をひそめ、人めをはかりて捨てんとしにげんとするをとらへて、引きとめて、すゝろにのませつれば、うるはしき人も、忽に狂人となりて、をこがまゝく、息災なる人も、目の前に

大事の病者となりて、前後もあらずたふれふす。祝ふべき日などは、淺ましかりぬべし。明くる日まで、頭いたく、物くはずに酔ひふし、生をへだてたるやうにして、昨日の事覺はず。おほやけあたぐしの大事をかきて、あづらひとなる。人をしてかゝる目を見すること、慈悲もなく、禮義にもそむけり。かく辛きめにあひたらん人、ねたく口をしと思はざらんや。ひとの國にかゝる習ひあるなりと、これらになき人の傳へきゝたらんは、ふしぎにおぼえぬべし。人の上にて見たるだに、心

うゝ。思ひいりたるさまに、心にぐしと見ゝ人も、思ふ所なく、笑ひのゝゝり、詞おほく、烏帽子ゆがみ紐はづゝ、脛高くかゝげて、用意なきけゝき、日來の人とも覺えず。女は額髪はれらかにかきやり、まばゆからず、顔うちさゝげて、うち笑ひ、盃もてる手にとりつき、よからぬ人は、肴とりて口にさしあて、みづからも喰ひたるさまあゝ。聲のかぎり、いだして、おのゝゝり、たひ舞ひ、年老いたる法師召出されて、黒くきたなき身を、かたぬきて、目もあてられず、すぢりたるを興ゝ見る人さへ、

うとまゝくにくし。あるはまた、我が身いみじき事ども、かたはらいたくいひきかせ、あるは酔泣きし下さまの人は、のりあひいさかひて、あさましくおそろし。恥かましく、心うき事のみありて、はてはゆるさぬものども、おしどりと、縁より落ち、馬くるまよりおちて、あやまちしつ。物にもものぬきは、大路をよろほひ行きて、ついひち門の下などにむきて、えもいはぬ事どもあちらゝ。年老い袈裟かけたる法師の小あらはの肩をおさへて、きこはぬ事どもいひつゝ、よろめきたる。

いどかはゆし。かゝる事をして、この世も後の世も益あるべきわざならはいかゝはせん。この世にてはあやまちおほく財をうしなひ病をまうく。百薬の長とはいへど萬の病は酒よりこそおこれ。憂をぬすといへども忍びたる人ぞすぎにしうきをも思ひいで、泣くめる。

卜部兼好……徒然草

第十八課 氷河奇談 其一

瑞西國の一少年ルヂーは勉強の効見はれて

一週間課業の結果殊によかりゝかば勇まゝげに學校より歸り來り母に其よしを語りぬ。母はルヂーを抱きながらうはいと喜ばしき事なり。其褒美には午後より祖父様の許に行きて遊び給へよといふ。

ルヂーの祖父なる人は家畜の番をなし又國の内外に賣り出す乾酪を製するが爲め二三の若者と共に平生山上の牧場に在りて起臥せり。総べて其あたりの村々は山の半腹に在ることなれば通路峻しく歩行困難にて殊に山上の牧

場に達する道筋は上るにも下るにも不慣の者には叶ふべきにあらねど其地の人は重き荷物を頭又は背に負ひながら苦もなく往來するなり。さればルヂーも牧場に行くをいとはざるのみか却て嶮阻を攀ぢ上るを此上なき樂と思へり。まして山上には慈愛なる祖父と愛らゝき家畜の一群あるをや。

さるほどにルヂーは母より牧場に赴くべき許を得たればそこくにして晝飯ををはり肩には若干の土産を入れたる袋を懸け手には一

振の杖を持ちて母に暇乞するに母はくれくもルヂーを誡めたり。よくく注意して暮れぬほどに必ず歸り來り給へ。又ゆめく氷河には近より給ふな。この頃のやうに温かにて雨の降りつゞきたる後には如何なる變の起らんも圖られずと。

ルヂーは謹みて仰を守るべきよし答へしかば母は重ねてそれにて母も安堵せり。其方の歸路には祖父様をも同道し給へといふに母上もいか思召すか兒も必ず然せんところ思ひしか

高等讀本 卷之八 四十五 走り出でぬ。
とばかり答へ捨て、足もいそぐ走り出でぬ。

第十九課 氷河奇談 其二

氷河は又氷原とも云ひ、山上の積雪融け流れて固まり遂に奇觀を呈するものにて、其大なるものは長さ數里に亘ることあり。其表面はザラザラとして、左程に滑ることなければ、之を横切るは格別危険ならざるやうなれど、決してさにあらず。處々に大なる罅裂ありて、其深さ八丈に餘り、時としては六十丈に及ぶものあり。今日平

原なりと思ひ、處にも明日は俄に小山の如き氷塊凸起して、路を遮るなど、變化の甚き事驚くに堪へたり。其上時ならず濃霧の立ち籠めて、あやめも分かずなることあり。されば氷河にて人畜の死傷すること間ある例にて、極めて熟練なる樵夫牧童と雖も、こゝを過ぐる時には、用心の上に用心を加ふる程なりとぞ。ルヂーの母がくれく、ルヂーを誡め、も實に理がかり。

ルヂーの父は早朝より羚羊獵に立ち出で、が永き夏の日のやうくに暮れかゝる頃、獲物

を肩にして立ち歸り、我が子の居合さるるを見て、其故を尋ぬるに、妻はルヂーが學校にて成績よかりし褒美として、牧場に行くことを許したる由を告げ、今頃は定めて歸路に就けるならんと言ひかけて、夫の顔の心配氣なるに心づき、其故を問へり。

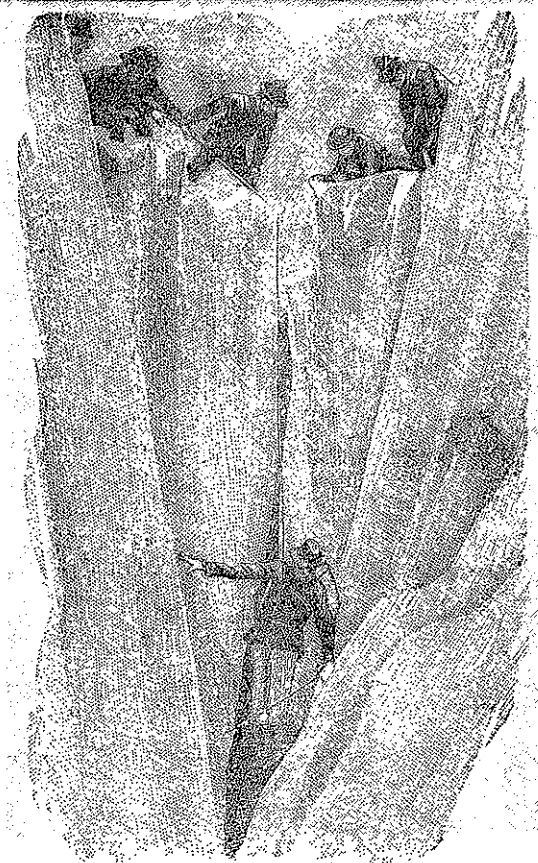
「何もむつかうき事にはあらず、昨夜聞きし所によれば、今日氷河を越えんとする一組の廻國者ありとて、人々は朝早くより道掃除をする筈なりとか、それゆゑ不圖ルヂーが氷河に近づくか

ねばよきがと思ひ、までなり併し畢竟は取越苦勞ならん。」

妻は斯くと聞きて、俄に氣色をかへ、叔は口惜しき事を致せりルヂーは決して氷河に近づくまじとは誓ひたれども、さうと知らば、牧場へは遣らざりしものを御身は、又何故に早う其事を知らせ給はざりしぞ。

「今朝知らせんとは思ひしかど、余が家を出る時には、御身尙ほ寢所に在りしかば、果さざりしなり。さもあれ、何の心配する事かあらん。見給へ

彼處に見ゆるは、ヘンリックならずや。彼は慥に氷河の道掃除に混り、男なるが如何なる用の



繩に懸て氷河の淵に下る

ありて、此處に來るにか。顔つきによりて察するに、惡しき報道にてはなきやうなり。

ヘンリック

は、氷河の道を開く事につき、ルヂーの父に相

談を要する事柄ありて來り、なり。其言ふ所に據れば、氷河には二三日以前まで見えざり、大罅裂の俄に現はれたりとの事なり。ヘンリックは、此事を語りて後、君聞き給へ、ニクラスの馬鹿者が、其大罅裂に革嚢を墜したりとて、大に憂ひ繩に縋りて、底も知れぬ罅裂に下り行き、が余が此處に來るまでは、まだ何の沙汰もなかりき。革嚢の中には、大切な品物のあるよしなれど、第一には罅裂の内部を見届けんどの危険なる物好に因る事ならん。

「それほどの事にて、貴き生命を顧みざるとは、
叔も愚なる男かな。何にもせよ、余は彼が首尾よ
く出で來らんことを望むなり。」

斯く語らふ折から、二人の村男が何か白布に
て蓋ひたる吊臺を肩に、田舎牧師を先に立て
て、此方に近づき來れり。其後には、一群の村人等、
哀しげなる顔して隨ひ來れるが、中にも女子供
等は何れも手を目にあて、嘸り泣きす。

ルヂーの父は斯くと見るより、思はずギョツ
とし、ルヂーならずやと叫びたり。

牧師はいと感動したる面持にて、然り神は禍
を御身の子に下し給へり。ニクラスが氷河の罅
裂の中にて、御身の子を見出し、叔こそ引上げて
擔ひ來りしなれ。

此時村人は、吊臺を家の中に昇ぎ入れたり。ル
ヂーの父は餘りの事に茫然として、言葉も出で
ず。妻は先程より家の裏手にありて、少くも此事
を知らざりしが、今も立ち歸りて、不審か、げ
に人々を見るほどもなく、吊臺に目をつけ、あな
やと叫びて、狂氣の如く走り寄り、手もあな

と白布を取り退くれば、其下より現はれたるは、生けるが如きルヂーの死骸なり。ルヂーは、元來愛らく無邪氣なる少年とて、一村中の人々にめではやされしかば、今や此有様を見て、一人として嘆き悲まざるものなり。

死骸を肩にせし二人の中、一人は彼のニクラスなりき。ニクラスは、此時聲をうるませながら、「余はルヂーを見出したるなり。ルヂーは、罅裂の底にて、顔を水に浸したるまゝ、死し居たり。見給へ、彼の身の中には、一點の疵もなし。思ふに彼は

罅裂に陥りし時、仰天して氣を失ひ、軀て水の爲に息を塞がれしならん。誠に憐れども哀しども、言ふべき言葉なし。」

ルヂーの父が、唯今までも氣遣ひにせしニクラスは、何の恙もあらざるに、無事ならんと思ひしルヂーは、却て不思議の禍にかゝり、しかもニクラスの背に擔はれて歸り來んとは、神ならぬ身の誰か思ひ懸くべき。

兎角する中に、日はいよゝゝ暮れて、あたり薄暗くなり、かば村人等は、一人去り二人去りて、今は唯數人のみ跡に残りぬ。折しもあれ、俄に人の叫ぶ聲の吹き來る風につれて、幽かに聞ゆるよと思ふ程に、やがて次第ゝに近くなりつゝ、今は手にとる如く耳に入りぬ。何事ならんと残りたる一人立ち出で、見るに、不思議や、一人の童兒手に大なる花束を持ちて、矢の如く駆け來りしが、忽ち此家に走りつき、母上、余はこゝにあり、余は決して死せざるなり、御身に捧げんとて、

携へ歸りし此花の美しきを見給へ」と叫びつゝ、遂に母の腕にヒツシと抱きつきぬ。

これに續きて村人等は、再び集ひ來りければ、その混雜いはんかたなし。夫婦は、死骸とルヂーとの顔をかたみがはりに見比べつゝ、呆れに呆れて言葉もなし。さりどて今歸りしはルヂーなること疑ふべくもあらねば、夫婦は暫くして我に返り、やうゝに愁眉を開きたり。さるにても、吊臺の上なるは、果して何人の死骸なるべきぞ。寄り集ひたる村人の中にて、一人もそれを見知

れる者なし。牧師はやゝ暫し死骸を検めてゐたりしが驚きたるさまにて、これは昨日今日に死せしものとは思はれず、全身石の如く凍りたるより考ふるに、正しく息絶えてより久しきものと覺ゆるなり。此死骸の圖らずも現はれしは實に不思議の外なけれど、母の眼をさへ欺くまでに、ルヂーと似通ひたるは、更に不思議ならずやといふ。

ルヂーの祖父は、ルヂーと共に山を下りしが、ルヂーは自己死したりといふ虚報を聞きて大

に驚き、片時も早く父母を安心させんとて、祖父を跡に、馳せ歸りしなり。されば祖父は、今やうく歸り着き人々より怪しき死體の事を聞きて、首を傾け、我が心に若しやと思ひ當る事となきにあらずいでくといひつゝ、篤と死體を改めしが、思はず膝を拍ちて、叔こそと叫びつゝ、其まゝ死骸の傍に跪きて、涙に咽ひながら、思ふに違はず、我が兄のセピーなりき。此中には知れる人ぞあらん。セピーは、九歳の時に、恰もルヂーと同年の時に、忽然として行方を失ひ、更に其踪

跡を知らざりしに六十餘年後の今日に至りて、再び昔のまゝの面影を見んとは、さても夢にてはあらざるか。

此話を聞きて人々は更に驚きたり。又老人が昔を忍びて嘆きに沈めるさまを見て感動せざるはなほ稍ありて老人は心を静め再び口を開きてセビーが行方の知れずなりたる時の事を詳しく語り、さていふやうセビーは日頃高きに攀ぢ氷河に近づくことを好みしかば、我が父母は常に之を憂ひ給ひき。ルデーが動もすれば危

きに近よらんとするを見て、我は毎に亡きセビーの事を思ひ出でざる時なかりしなり。今思ふにセビーは羚羊獵の跡をつけて、そゝろに氷河に踏み入り、圖らずも罅裂に陥りて命を落したるに、罅裂は其後上部の方のみ閉ぢ塞がりて、今日に及びしを昨日に至りて再び舊き口を開き、遂に斯かる不思議の生ずるに至りしものならん。思はざりき我半死の白頭翁となれる今日、復び兄の花の如き幼顔を見んとは。

村人等は且つ驚き且つ嘆きて夜の深くるを

も覚えざりしが、やがて喜びと悔みとを一時に述べて、各家に歸り去れり。次の日、ルヂーが母の爲めに持ち歸りし花を以て、セビーの死骸を蓋ひ棺に收めて、墓所に葬り、跡懇に吊ひけり。

牧師は其後此村の古き記録を取調べしに、セビーが失踪の顛末を記し、終りに人相書を添へたる記事を見出したり。其人相書にいふ所は、氷河の罅裂より現はれたる彼の死骸と、毛頭異なる所なかりとぞ。

第二十一課 誠

人は萬の事に達し、萬の藝にくはしくとも、誠なきものは花ありて實なきが如く、肉ありて骨なきが如し。されば形備はるとも、誠なき者はたゞに畫ける人の如くにぞある。稻にもあれ、麥にもあれ、花のみならばいかで貴からむ。太くたくましく肥えたりとも、骨なくしていかで物の用に立つべき。弓射る事を學び得て、百度放ちて百たび中るとも、我に一つの誠なくば、童子の雀小弓射る如くにて、何の用にか立つべき。馬にのる

にも劍つかふにも君には忠親には孝朋友には信とて其實ありてこそ用には立つべけれ。

今の世の人ちと才ありと見ゆるは我が誠は言はで只時にとり人に應じてよきさまに言ひなす事ぞなげかはしき。あかるに世の俗輩は彼こそ幾人に交りても人に應じてよきさまにすなれと譽めのゝしり我も亦よく人に合せて交るよと思ひて耻づべき事とも思はざるこそ嘆かはしけれ。まゝて誠ありがほに口たゝきて世の人をも舌もて欺き此事はあしくとももし咎

むる人あらば又我舌もてよく言ひなしてむど我はがほなるやからは人たる心消失せて鳥獸の心になりたるを知らざる愚さよ。かゝる心にてはたとひから倭の書博く見て萬の事に達し萬の藝に熟したりとも何の益かあるべき。彼の實なき花骨なき肉の如くにこそあなれ。

又かゝる人常には心にあらぬ事言ひて誠なきやうなれどもこは世を渡るわざなり。大事に至りては我とても誠をこそ立つべけれと云ふ。かやうに成るべき事ならば道學ぶ君子の心を

苦むるにも及ばず。是等は遁れ言いふなり。君子
大人も、大節に至り、露も心動かさで、誠立てむこ
とは、難き習なるを、常々我が心を欺きて養ふこ
となくば、其時に至りて、誠の立つべき理なり。さ
れば小事にもせよ、我が心を露欺かず、彼の言を
巧にし、色を令くする事をはたとやめむと思ひ、
常に義勇を養はざり、大節に臨みても、誠は出でぬ
べし。されば我々の才あり、藝ありと見るも、誠の
消失せたるぞ多き。いかで、それを才あり、藝あり
とは云ふべき。才なく、藝なく、人と語り合ひても、

愚なるやりに見ゆる人に、誠あるぞ多き。誠あり
て才なきは、みやびやかならぬ花に、よき實結ぶ
が如し。忠と云ひ、孝と云ふも、この誠にこそあれ。

松平定信……退閑雜記

第二十二課 安藤聖秀

安藤左衛門聖秀ハ、北條高時ガ臣ナリ。新田義
貞ノ妻ノ爲ニハ伯父ナリシカバ、鎌倉スデニ陷
ル時、彼ノ女房、義貞ノ文ニ我が文ヲ添ヘテ、ヒソ
カニ聖秀ガモトヘツカハシケル。聖秀ハ高時ガ

將トシテ新田ノ兵ト戰ヒシガ、郎等大カタ討死シ、聖秀モ薄手アマタ負ヒテ引キカヘシケルガ、高時スデニ屋形ニ火ヲカケテ、東勝寺ヘ落チケルトイヘバ、御屋形ノ燒跡ニハ、討死ノモノ多ク見ユルカト問ヒケルニ、一人モ見エズトイフヲ聞キテ、口惜キ事カナ、イザ殿原トテモ死ナン命ヲ、御屋形ノ跡ニテ、心靜ニ自害セントテ、百餘騎ヲ相從ヘテ、ヤカタノ跡ヘ赴キシガ、今朝マデ薨ヲナラベテ、サシモ奇麗ナリシ大厦高牆、忽ニ灰燼トナリヌルヲ見テ、聖秀感慨ニタヘズ、涙オサ

ヘ惘然トシテ立チタル所ヘ、彼ノ文ヲモテ來リヌ。之ヲ披キ見レバ、鎌倉ノ有様、今ハサテトコソ承リ候ヘイカニモシテコナタヘ御出候ヘ、身ニカヘテモ申宥ムベシトアリ。聖秀之ヲ見テ、大キニ色ヲ損ジテ申シケルハ、吾今マデ主恩ニ浴シテ人ニ知ラル、身ガ今事ノ急ナルニ臨ミテ、降人ニナリテ出デナバ、豈恥ヲ知リタル者トイハシヤ。サレバ女性心ニテ、タトヒカヤウノ事タイハルトモ、義貞勇士ノ義ヲ知ラレバ、サル事ヤ有ルベキト制セラルベシ。又義貞、コナタノ許否ヲ

試ミンタメニイヒコサルトモ、北ノ方ハ我方ノ名ヲ失ハジト思ハレバ、カタク之ヲ拒ガルベシ、只似タルヲ友トスルウタテサヨト、一度ハ恨ミ、一度ハ怒リ、彼ノ使ノ見ル前ニテ、其文ヲ刀ニ握リ加ヘテ、腹カキ切テ死ニケル。嗚呼聖秀イカナル人ゾヤ、義氣ノ勇壯、志操ノ潔白、是ニ過ギタル事ヤアルベキ。

室直清……………駿臺雜話

第二十三課 小宮山内膳

近代ニテハ、武田勝頼ノ臣小宮山内膳ガ節義コソ最モ感嘆スルニ餘アレ。内膳ハ勝頼近習ノ臣タリシガ、天正年中ノ事ニヤ、内膳人ト爭訟シケル事アリツルニ、勝頼讒人ノ言ヲ用ヒテ、内膳ガ不直ニ決セシカバ、内膳罪ナクシテ永ク逐ヒ退ケラル、程ニ是非ナク家ニ蟄居シテ數月ヲ經ケルガ、織田ノ兵甲州ニ亂入シテ勝頼敗北シ、故府ヲ棄テ、溫井常陸介ヲ先トシテ、纔ニ四十人ノ兵ト天目山中ニ奔ルト聞エシカバ、内膳身ヲ以テ急ニ赴キシガ、道ニテ追ヒ付キケリ。

前ノ内膳ト争ヒシ者并ニ讒セシ者ヲ問ヒケルニ「何レモ疾クニ逃レ去リヌ」ト言ヘバ、内膳慷慨シテカタヘノ人ニ言ヒケルハ「君我ヲ用ヒズシテ棄テ給フニ、今出デ、其難ニ死セバ、君ノ明ヲ損スルニ似タリ。又死セ予バ臣ノ義ヲ傷ル。ヨシ君ノ明ヲ損スルトモ、臣ノ義ヲバ傷ラジ」トテ、四十二人ト共ニ國難ニ殉ヒケリ。

此難ニ甲州ノ士皆勝頼ニ背キテ逃レ去リシニ、四十二人バカリ、顛覆流離ノ間ニ附キ纏ヒテ、聊カ貳心ナク、國難ニ殉ヒシハイヅレモ節義ノ

士ト申スベシ。中ニ内膳ハ、讒ヲ以テ冤枉ニ遭ヒシヲモ怨ミズ、從者ノ列ニモアラヌ蟄居ノ身トシテ、外ヨリ來リテ死ニ赴キシ事、其忠烈遙ニ溫井等ガ上ニ在ルベシ。

武田滅亡ノ後、家康公、内膳ガ忠義ヲ深ク感シタマヒ、其子ナクシテ祭祀ノ絶ユルヲ哀ミ、給ヒテ、内膳ガ弟小宮山又七郎ヲ召シ出サレシガ、其後小田原ノ陣ノ前、武職ノ人ヲ定メラレシニ、又七郎ヲ以テ御長柄鎗奉行ニ仰セ付ケラレケリ。其時内膳ガ勝頼ニ對シテ忠義アリシ事ヲ精シ

ク仰セ立テラレテ誠ニ武士ノ手本ト思召ス。又七郎未ダ弱年ナレドモ、兄内膳ガ忠義ヲ感シ思召スニ由リテ重キ職ヲ命ゼラル、ヨシ上意アリケリトゾ。誠ニ死後ノ面目、忠義ノ驗シト申スベシ。

室直清……駿臺雜誌

第二十四課 豊後守忠秋の廉潔

萬治寛文の頃かどよ世に鶉流行して富貴の家互によき鶉を購ひ求めし程に、その價頻に踊

貴せり。阿部豊後守忠秋も、その頃鶉をすかれて、常に籠を座側におきて、鳴かせ聞かれけり。それをさる列侯なる人聞きて、そのころ世に隠れなき鶉を高價に求めて、ある官醫をもて、近き頃珍らしき鶉を求め得て候ふ。慰に進むたきよしをいはせけり。その官醫豊州の許へ來りて、その旨を達して、御もらひ候はゞ、さぞ悦びにてあるべく候ふ。といひければ、豊州きかれて、先へよく心得て、とばかりにて、どかくの返事なし。あはしありて、近習の者を呼びて、鶉籠の口を皆庭の方へ

向けよとある程に、皆外へ向け、れば、その口を
残なく明けよとある程に、皆明け、れば、鶉残ら
ず籠を出て飛びさりぬ。かの官醫見て、不審にお
もひ、久しく御手馴れし鳥にて、又立ちかへり候
ふにやと、いへば、豊州、いや、然にてはなし、今日よ
り残らず放ちやるにて侍る、さて序ながら申す、
某ごとき上の御威光にて、人に執し思はる、身
にて物はすくまじき事にて侍り。某この頃ふと
鶉をすき候へば、早さやうに聞ゆる人もおはし
候ふ。向後はふつと鶉ずきを止め侍るべしとい

はれしかば、かの官醫も、手持なく見えしとぞ。我
がすきたる事は止めがたく、人の志とて、たまた
ま贈るものは、もらひてもさてあるべきを、上の
御爲を忘れぬよりして、假初の事にも世の俗へ
も移り、我が權威にもなる様の事は、堅く慎まる
ゝ程に、かくありけり。うの外同くころ、執權の衆
はいづれもつゆ身に驕なく、權に誇らず、何事も
公み沙汰せられし程に、その風下に移りて、末々
の役人までも、廉潔質直なる人ありて、風俗を維
持せしぞかし。

第二十五課 山内一豊馬を買ひし事

むかゝ一豊織田家に出で、仕へし始東國第一の名馬なりとて、安土に引き來りて商ふ者あり。織田殿の家人等之を見るに誠に無雙の名馬なり。されども價餘りに貴くして買ふべき一人もなく、むなしく引きて歸らんとす。

此頃一豊猪右衛門と申し、が此馬ほしく思へども求むる事いかにも叶ふべからず家に歸

りて世の中に身まづしき程口惜しき事はなく、一豊仕への始なりかゝる馬に乗りて見參に入りたらんには、屋形の御威にも預るべき者を獨言せしに妻つくくと聞きて、其あたひいか計にやと問ふ。黄金十兩とこそいひつれと答ふ。妻さ程に思ひ賜はんには、其馬求め給へ、あたひは自分參らすべしとて、鏡のいへの底より黄金十兩取り出で、參らす。

一豊大に驚きて、此年頃身まづしき事のみ多きに、内に此黄金ありともしらせ給はずいかに

心強くはつゝ、み給ひけん、されども此馬得べし
とは思ひもよらざりき」と且つは悦び且つはう
らむ。妻は「のたまふところ理にこそ侍れ、さりな
がら、是はあらはが父の此家に参りし時に、此鏡
の下に入れ給ひて、あなかしこ、是よの常の事に
用ふべからず、汝が夫の一大事あらん時に参ら
せよとて賜ひき。されば家貧しく苦むなどいふ
事は、世の常のならひなりければ、いかにも堪へ
忍びてもすぎなまし、誠か此度都に御馬揃ある
べしなど聞ゆ。もしさもあらんには、此事天下の

見物なり、君又仕の始なり。かゝる時ならずば、屋
形にも傍輩にも見知られ給ふべきよしもなし。
よき馬召して見参に入れ給へと思へば、こゝろ参
らすれといふ。一豊やがて其馬を求む。

程なく都にて馬揃ありし時、織田殿此馬御覽
ありて、大に驚き給ひ、「あつぱれ馬や、名馬や、何者
の馬ぞ」と仰せありしに、「これは東國第一の馬な
り」とて、賣りに人の引きて参りしが、あまりの價
貴くして、誰も買ふ事かなはずむなしく引きて
歸るべかりしを、山内が買ひ得て候ひぬ」と申す。

信長聞しめしめて「價貴き馬なり。當時天下に信長が家ならでは買ふべき人なり」とて、奥よりはるく來りしを空しく歸したらんには、無念の至りなるべし。其山内は年頃久き浪人と聞け、家もさず貧乏からんに、買ひ得たる事の神妙さよ。且つは信長が家の耻も雪ぎ、且つは武士のたしなみいとかしこしと感づ給ふ事大かたならず。是より次第に身を起し、といふ。

新井君美……藩翰譜

第二十六課 徳川家康厩を新造せず

徳川家康が藤森の厩いたく破損に及びければ、其臣加々爪隼人之を新造せんと請はれけるに、家康「雨漏らば其所のみ葺きかへよ、壁崩れなば其隙ばかりふさぎれけよ、此外は舊のまゝにてよかるべし」といふ。隼人重ねて「今上方の諸大名が馬を飼ふを見るに、夏は蚊帳をつりて蚊を防ぎ、冬は蒲團を被せて寒を禦ぐなど、馬を愛すること至らざるなり。然るに君の御厩には、戸口にあらむしるを掛け、常に糞を食まひむるに過

ぎず。こは餘り疎略には候はずや」と申せば、家康
いへるやう、抑、武士の馬を飼ふは、外見の美を飾
りて世人に誇り示さん爲めにあらず、専ら戦時
の用に立てんとするなり。余が平生あらむゝろ
の中に、糒を與へて飼ふ馬と、上方の蚊帳をつり、
蒲團を被せて飼へる馬と、事の變あるにあたり
て、孰れか能く險坂を馳せ登り、激流を駆け涉り、
深田を躍り出で、堀切を飛び踰に、又、西寒を凌ぎ、
酷暑に堪ふるべきや。汝よく、これを思へ。必
ず厩を造り、馬を養ふに、上方風を眞似ることな

かれ」と堅く戒められ」とぞ。

第二十七課

蒙古の來寇

其一

今を距ること六百有餘年前、支那の北なる蒙
古に忽必烈といへる英雄ありけり。人と爲り剛
勇にして、武略に長ぜり。夙に韃靼地方を征服し、
終に其鋒を南して、宋の州郡を略取し、威勢甚だ
熾なり。かば、隣國皆風を望みて、之に服従せ
ざるはなし。而るに獨り我邦のみは、使聘をだに
通ぜざりければ、第九十代龜山天皇の文永五年



北條時宗の原

忽必烈は高麗人に因りて書を我が邦に贈りて
いひけらく「今より以後宜しく好を通じ親睦す
べし然らざれば兵を差向くべし」と朝廷此書を
得て評議を盡し遂に返書を與へんと給ひけ
るに時の執權北條時宗は之を不可と來書の
文言無禮至極なり我が國體を辱むること少
なからず決して返書を與ふるに及ばずとて聽
かざりければ終に返書の事なかりき。

これより後も蒙古の使來ること數回に及び
しかど皆拒みて納れず其都度太宰府に命じて

高等讀本 第六十二 學 福
逐ひ還しぬ。

同十一年十月蒙古の賊兵三萬ばかり對馬に來り寇す、守護代宗助國力戰して防禦しけれど、叶はずして終に打たれぬ。賊兵勢に乘じ、轉じて壹岐に押し寄せ、互に戰ふ程に、守護代平景隆も亦討死す。

賊兵壹岐對馬の二島を奪ひ取り、やがて筑前の海岸に攻め來る。其勢甚だ猖獗にして、殆ど當るべきにあらず。されども少貳景資少しもひるまず、勇を鼓して拒ぎ戰ひ、夥多の賊徒を殺し、終

に賊將劉復亨を射殺す。賊兵之が爲めに大に辟易し、叶はしとや思ひけん、全軍夜に乘じて遁れ去れり。

是時蒙古の國勢は、愈益強大となり、終に全く宋をも滅ぼして之に代り、國號を元と改む。

其後後宇多天皇の建治元年、元必ず志を遂げんとて、又杜世忠、何文著を我が邦に遣して返書を促す。時宗益々無禮なるを怒り、之を鎌倉に送り、龍口にて首を刎ぬ。是れ元をして永く我が邦を覬覦するの念を斷たしめんと、の處置なりけり。

弘安二年元の使周福等復た太宰府に至る時
宗是をも亦捕へて首を刎ぬ。

第二十八課

蒙古の來寇

其二

忽必烈は我が再び使者を誅せしを憤り一舉
に我が邦を討滅ぼさんとして弘安四年七月支那
蒙古高麗三國の兵十餘萬を擧げその臣范文虎
を大將とし兵艦四千艘を以て我が國に攻め來
る。

北條時宗は豫ねて期したることなれば更に

驚くことなく誓つて勁敵を撃ち破り我が國光
を海外に發輝せんとして令を諸國に下して西海
の兵備を嚴にしけるに國家の難に身命を抛た
んとする者先を爭ひて皆鎮西に馳せ集まり海
岸を守りて元兵の攻め來るを待ち受けたり。
かくて程なく元兵は壹岐對馬を屠りて筑前
の海上に攻め來る。廣き海上全く船に填められ
て帆影宛然雲の如し。されども我兵少くもこれ
を畏れず死を決して敵船中に躍り入りつゝ晝
夜防ぎ戦ひければ元の大軍も上陸して内地に

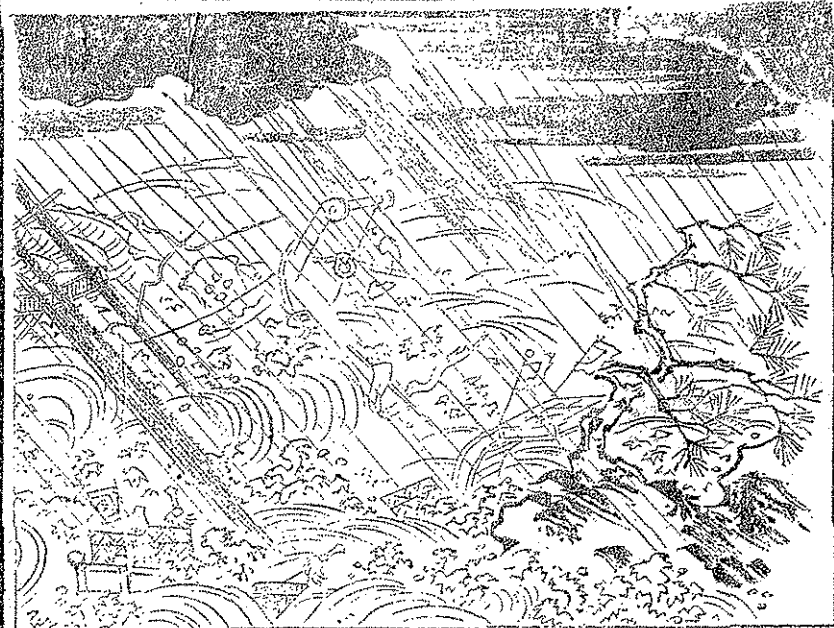
攻め入ること能はず。

時に龜山上皇は深く大御心を惱ませられ宸筆の宣命を伊勢の大神宮にたてまつり御身を以て國難に代はらんと禱り給へり。

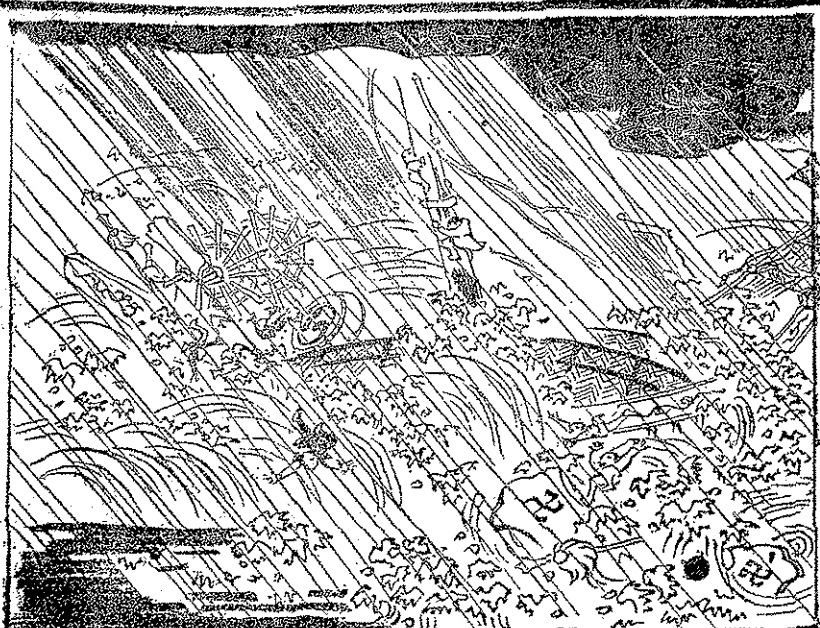
さて賊は我が兵の屢船中に襲ひ入るを患へ大船を鎖り合せ寄する者を目かけて石弓を下しければこれより我兵近づくこと能はざりに河野六郎通有は伯父の通時と共に僅か二艘の船にて漕ぎ出し石弓の間を事ともせず海を蔽へる敵兵の中に分け入り大將の船を認めて

乗り移らんとす。賊これを見て俄に駭き騒ぎ頻りに石弓を放ちてこれを防ぎければ通有遂に左の肩を強く射らる。

されども少しもひるまず片手にて櫓を仆して賊の船へ架け渡し之より乗りて切り廻はり多くの賊を斬り賊將一人を擒にして悠然我が陣屋へぞ還りける。これに踵きて安達次郎大友藏人等進みて奮闘したりかばさうもの賊もこれに恐れて終に鷹島の沖に退きけるに一夜海上俄に暴風起り怒濤山岳の崩るゝが如く賊船



悉く覆没し、兵士概ね溺死せり。されども尙ほ鷹島に打ち揚げられて残れる兵も多かりしが、我が兵之を知り、急に掩ひ撃ちて散々に斬り殺し、降を乞ふもの千餘人をも救すべき限りにあらねば斬り棄てけり。實に此役十萬の元兵盡く我



が海上に死して、其中生てき本國に歸りしは僅に三人に過ぎざりとぞ。
かくて元兵を退治せし由京都及び鎌倉に注進ありければ、公家武家を初め天下萬民の歡聲實に沸くが如し。朝廷にては是月十七日祈年祭

に方れるを以て、元兵退治の御悦と共に祈年奉幣使を伊勢の大神宮及び諸國の大社に立てられけり。

是より後、元兵再び我が邊を窺ふことなり。是れ蓋し時宗が力なりと謂ふべし。

嗚呼時宗の如きはかの勅語に宣へる「一旦緩急アレバ義勇公ニ奉じ、以て天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ」との御趣旨を奉體せしものといふべし。

第二十九課 那須與一の事 其一

去程に阿波讃岐に平家をうむいて源氏を待ちける兵どもあるこの峯この洞より十四五騎二十騎打ちつれはせ來る程に判官ほどなく三百餘騎になり給ひぬ。

既而阿波讃岐叛平氏而待源氏者所在山洞往々十騎二十騎相將而來歸判官兵及三百餘

今日は日暮れぬ勝負を決すべからずとて源平互に引退く所に沖より尋常にかざりたる小船一艘汀に向ひて漕ぎよせ渚より七八段許りに

も成りしかば舟を横さまになす。あれはいかに
とみる所に、舟の中より年のよはひ十八九ばか
りなる女房の柳の五衣にくれなるの袴着たる
が、皆紅の扇の日出たるを、舟のせがいに挿み
くがへ向ひてうまねさける。

當日日向暮不可決勝源平交收兵而退海上艷裝一小舟望岸搖
來距岸七八段轉而橫舳而止源軍疑而視焉舟中出宮娃年可十
八九綠衣紅袴開純紅扇畫旭曠者揮竿樹之船頭向岸而招

判官後藤兵衛實基を召して、あれはいかにと宣
へば、射よどこう候はめ、但大將軍の矢れもて

に進みて、けいせいを御覽ぜられん所を手たれ
にねらひて射落せどのはかりこと、こそ存候
へ。去りながら扇をば射させらるべうもや候は
んと申しければ、

判官召後藤實基問曰彼欲何爲對曰是應使我射也臣意或者將
軍進當箭道而觀翫姬妓則欲巧狙而射落也但扇則似可使射者
焉

判官、味方に射つべき仁は誰か有ると問ひ給へ
ば、手たれ共多く候中に、下野の國の佳人那須太
郎資高が子に與一宗高こそ、小兵にて候へども

手はさいて候と申す。判官「證據が有るか。」さん候。かけ鳥などをあらそうて三に二は必ず射落し候と申しければ判官「さらば與一よべ」とて召されけり。

判官曰。我軍可能射者爲誰對曰。巧射固多。就中下野國人那須太郎資高之子與一宗高者。力雖稍劣。而手則巧利矣。判官曰。有徵乎。曰。諾。其賭射禽鳥三。必二得矣。乃命召之。

與一其頃は未だ二十許の男なり。かちに赤地の錦をもつて、ねほくびはたそでいろへたるひたれに、よもぎれどしの鎧きてあゝろの太刀

をはき、二十四さいたる切生の矢ねひ、うすぎりうに鷹の羽あり合せてはいたりけるぬためのかぶらをぐさゝそへたるしげどろの弓あきにはさみ甲をばぬいで高ひもにかけ判官の御前にかゝこまる。

與一尙二十左右之男子也。披茶褐戰袍、紅錦飾、襟袂、綴青緋甲、佩白帶刀、背負一篋、二十四枚斑羽、箭加挿鷹羽、鳴鏑一枚、腋綴纏漆弓、脫鍔繫鎧紐、進而跪馬前。

第三十課

那須與一の事

其二

判官、いかに與一、あの扇のまん中射て、敵に見物せさせよかと宣へば、與一、つかまつる共存の候はず。是を射そんずる物ならば、ながき味方の御ゆみ矢のきずにて候べし。一定仕らふずる仁に仰せ付らるべし。もや候はん」と申しければ、判官、大きにいかりて、今度鎌倉を立ちて西國へむかはんずる者共は、皆義經が下知を背くべからず。それに少しも仔細を存ぜん人々は、是よりとろく鎌倉へかへらるべし」と宣ひける。

判官曰、宗高汝射扇正中、令敵軍寓目、則如何辭曰、臣自料不知其

可能也。若誤射、則永爲我軍弓矢之辱矣。請更命定能者。判官大怒曰、此行發鎌倉赴西國者、其豈可違義經之令。若毫存枝梧者、須速歸鎌倉也。

與一、かさねて辭せば、あゝかりなんとや思ひけん。左候は、はづれんをば存し候はず。御譏で候へば、仕てこゝろ見候はめとて、御前をまかり立ち、黒き馬のふとくたくまゝきに、まろほやすつたる金ふくりんの鞍置きて、乗りたりけるが、弓取りなほし、手綱はいくつて、汀へ向ひて、歩ませける。味方の兵共、與一がろをはるかに見送

りて、此若者一定仕らうずると覺に候と申しければ、判官も頼もしげにう見給ひける。

與一私謂。若再辭恐成惡意。乃曰。然則其逸則臣不敢知也。既有命矣。請嘗試之。乃起鐵驢肥健。駕金鞍以跨之。整頓弓在手。促轡向江而步。我兵目送久之。言曰。此壯夫定能者。判官亦視似以爲委得入焉。

矢比すこゝ遠かりければ、海のうち一段ばかり打入れたりければ、猶扇のあはひ七段ばかりも有らんとこそ見にたりけれ。比は二月十八日酉の刻許の事なるに、折ふゝ北風はげゝう吹きけ

れば、磯打つ波も高かりけり。舟はゆり上げゆりすゑ漂へば、扇も串に定まらずひらめいたり。沖には平家舟を一面にならべて見物す。くがには源氏くつばみをならべて之を見る。いづれもいづれもはれならずといふ事なり。

既的道較遠。驅馬入海一段許。距扇猶有七段。遠近時二月十有八日。日已加西。會北風頗烈。高浪打岸。船乍湧乍陷。而漂泛扇亦不安。竿而閃曜。海面則平軍一行列。舳而注目。岸上則源軍並轡而凝視。極爲顯場盛事矣。

與一目をふさいで、南無八幡大菩薩別しては我

國の神明日光の權現、宇都宮那須の湯泉大明神願はくはあの扇のまん中射させてたまはせ給へ。是を射損ずるものならば弓切りをり自害して人に二たびれもてを向ふべからず。今一たび本國へかへさんと思へめさば此矢はづさせ給ふなと心の中に祈念して目をひらいたれば風も少し吹きよあつて扇も射よげにこそ成りたりけれ。

與一閉目默禱曰、南無八幡大菩薩、殊我國日光權現、宇都宮那須湯泉大明神、請令射夫扇正中也。若誤事者、折弓自裁、面不可再向。

人也。神欲使一歸本國者。此矢勿使逸焉。既開目風粗恬扇如容射者。

與一かぶらを取りてつがひよつ引いてへうと放つ。小兵といふ條十二そく三つふせ弓はつよし、かぶらは浦ひく程長鳴してあやまたず扇のかなめぎは一寸ばかりを射てひいふつとぞ射きつたる。かぶらは海に入りければ扇はうらへずあがりける。春風に一もみ二もみもまれて海へさつとぞちりたりける。皆紅の扇夕日のかやくくに白波の上にたゞよひうきぬゝづみぬ

ゆられけるを沖には平家ふなばたをたゝいて
感ふたり。くがには源氏籠をたゝいてどよめき
けり。

乃取鳴鏑架上引滿而發。雖然劣力而十二拳飛鏑響浦長鳴射斷
扇眼上寸許餘力遠去入海扇則揚而舞空被春風翻弄一再颯然
散落海中。純紅之扇夕日映發委白激浮沈泛泛舟師擊舷而賞贊
陸軍鼓箠而謹呼。

和文 平家物語
漢文 柴野栗山

高等讀本卷之八終

版權所有 高等讀本 全八冊

卷一 明治二十六年二月二十五日發行
卷二 明治二十六年六月五日發行
卷三 明治二十六年六月十五日發行
卷四 明治二十六年六月二十五日發行
卷五 明治二十六年六月二十五日發行
卷六 明治二十六年六月二十五日發行
卷七 明治二十六年六月二十五日發行
卷八 明治二十六年六月二十五日發行

定價	
卷一、二	各金十五錢
卷三、四	各金十六錢
卷五、六	各金十七錢
卷七、八	各金十七錢

著者 山縣悌三郎
發行人 小林義則
印刷所 文學社工場
東京府下北豐島郡上野村九番地
東京市日本橋區本町四丁目十六番地
東京市日本橋區本町三丁目十二番地

